専任教員教育研究業績

平成28年5月13日記入

氏名	ふりがな	所属学科	職位	性別
佐藤 由香理	さとう ゆかり	保育学科 通信教育課程	教授・准教授・講師・助教	男・女

小田原短期大学における担当科目名
保育の心理学Ⅰ、保育の心理学Ⅱ

学歴

和暦（西暦）年　月	事　項	学位
平成13（2001）年4月	宮城学院女子大学学芸学部人間文化学科心理コース　3年次編入学	
平成15（2003）年3月	宮城学院女子大学学芸学部人間文化学科心理コース　卒業	学士（人間文化学）
平成15（2003）年4月	宮城学院女子大学大学院　人文科学研究科　人間文化学専攻（修士課程）入学	
平成17（2005）年3月	宮城学院女子大学大学院　人文科学研究科　人間文化学専攻（修士課程）修了	修士（人間文化学）
平成17（2005）年4月	宮城学院女子大学大学院　人文科学研究科研究生　入学	
平成18（2006）年3月	宮城学院女子大学大学院　人文科学研究科研究生　修了	

教育歴・職歴

名称	期間	教育内容又は業務内容
医療法人秀公会　あづま脳神経外科病院	平成9年4月～平成12年3月	医療事務
社会福祉法人ロザリオの会　児童養護施設　仙台天使園	平成17年4月～平成20年8月	常勤的非常勤心理療法士
学校法人三幸学園　仙台医療秘書福祉専門学校	平成18年10月～平成28年3月	非常勤講師　「心理学」「人間関係論」「臨床心理学」「子育て心理学」「ストレスマネジメント教育」「幼児虐待」「医療ソーシャルワーク」など心理学関係教科
仙台市太白区役所	平成23年7月～平成27年7月	非常勤嘱託心理判定員
近畿大学九州短期大学	平成26年4月～平成28年3月	通信教育部　非常勤講師　「発達心理学」
小田原短期大学	平成28年4月～現在	保育学科通信教育課程特任助教

所属学会等

名称	活動期間	活動内容（役職等の活動を含む）
東北心理学会	平成13年4月～現在	会員　学会発表
日本発達心理学会	平成17年3月～現在	会員　学会発表
日本臨床発達心理士会	平成17年3月～現在	会員
日本子ども虐待防止学会	平成20年4月～現在	会員
日本心理職協会	平成22年9月～現在	会員

社会活動等

名称	活動期間	活動内容

担当教科目に関する資格・免許等

名称	取得年月	取得機関
認定心理士	平成15年　2月	社団法人　日本心理学会
臨床発達心理士	平成17年　3月	一般社団法人　臨床発達心理士認定運営機構

研 究 実 績 に 関 す る 事 項				
代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文） 1．集団ロールシャッハ・テストによって測定される反応領域とラテラリティ特性との関連性	単	平成17年3月	宮城学院女子大学大学院人文科学研究科学位申請論文（修士課程）	「こころ」の働きは、その働きの現れである「行動」をみることによって知ることができ、その「行動」は「脳」によって生み出されると考えられる。では、人間の様々な「行動」を「脳」が支配しているならば、心理検査や心理実験の結果にも脳機能との関連がみられるのではないかという仮説のもと、心理検査である集団ロールシャッハ・テスト、心理基礎実験である複合数字抹消検査、そして、大脳半球機能差すなわちラテラリティという3つの柱からそれぞれの関連性を明らかにした。
2．集団ロールシャッハ・テストによるパーソナリティ測定と大脳半球機能差(laterality)の関連性	共著	平成18年3月	宮城学院女子大学大学院人文学会誌第 7 号, p.15～23	「こころ」の働きは、その働きの現れである「行動」をみることによって知ることができ、その「行動」は「脳」によって生み出されると考えられる。では、人間の様々な「行動」を「脳」が支配しているならば、心理検査や心理実験の結果にも脳機能との関連がみられるのではないかという仮説のもと、心理検査である集団ロールシャッハ・テスト、心理基礎実験である複合数字抹消検査、そして、大脳半球機能差すなわちラテラリティという3つの柱からそれぞれの関連性を明らかにした。
（その他） 「学会発表」 1．携帯電話の利用がパーソナリティに与える影響	単	平成15年8月	東北心理学研究第 53 号, p.37	携帯電話が必需品となっている今日、大学生の利用の現状はどうか。また、利用することにより利用前と感情やパーソナリティに変化等が生じたか。さらに、それらの変化は利用年数と関わりがあるのか等を検討した。
2．Rorschach Test における集団法と個別法の比較	単	平成 16 年 9 月	東北心理学研究第 54 号, p.42	「心理適応機能状態」を測定する検査として集団ロールシャッハ・テストがある。しかし個別法に比べ、その実施や研究は少ない。そこで、集団ロールシャッハ・テストとはどのようなものか、ということを明らかにし、また、集団ロールシャッハ・テストは個別法と「別種の検査」といわれているため、両者を比較検討してみることを目的とする。
3．集団ロ・テストおよび CDCT にみるラテラリティの特性	共著	平成 17 年 6 月	東北心理学研究第 55 号, p.40	「こころ」の働きは、その働きの現れである「行動」をみることによって知ることができ、その「行動」は「脳」によって生み出されると考えられる。では、人間の様々な「行動」を「脳」が支配しているならば、心理検査や心理実験の結果にも脳機能との関連がみられるのではないかという仮説のもと、心理検査である集団ロールシャッハ・テスト、心理基礎実験である複合数字抹消検査、そして、大脳半球機能差すなわちラテラリティという3つの柱からそれぞれの関連性を明らかにした。
4．適応支援場面における集団ロールシャッハ・テストの適応可能性	共著	平成18年3月	日本発達心理学会第 17 回大会発表論文集, p.566	「心理適応機能状態」を測定する検査として集団ロールシャッハ・テストがある。近年、学校等における集団への不適応や問題行動が生じていることも少なくない。そこで、児童等の適応状態の現状把握、スクリーニング等の目的として教育・矯正等の現場で、個人の適応状態を把握する必要があるが、簡便な測定を行える心理検査は少ない。集団ロールシャッハ・テストはその要件をある程度満たされているものと考えられるが、実証的な研究例は少ない。そこで、集団ロールシャッハ・テストの適応可能性を検討した。

5．高年齢入所児童に対する施設の現状と問題点	共著	平成 18 年 9 月	東北心理学研究第 56 号, p.75	児童養護施設において低年齢児童は生活全般に関して手がかかることが多く必然的に職員と接する時間が多くなる。反面、ある程度自立している高年齢児童は低年齢児童に比べ関わる時間が少ない。このような高年齢児童に対する処遇の現状を調査した。
6．児童養護施設における高年齢児童への処遇の現状について	共著	平成 19 年 3 月	日本発達心理学会第 18 回大会発表論文集, p.782	児童養護施設において低年齢児童は生活全般に関して手がかかることが多く必然的に職員と接する時間が多くなる。反面、ある程度自立している高年齢児童は低年齢児童に比べ関わる時間が少ない。このような高年齢児童に対する処遇の現状を調査し、問題点を明らかにした。
7．児童養護施設における児童の要望からみた発達的特徴	共著	平成 19 年 9 月	東北心理学研究第 57 号, p.40	児童養護施設に入所している子ども達はある程度制限の設けられた集団生活とならざるを得ない。そこで施設生活の中で日頃思っていること、望んでいること等を調査し、そこから発達的特徴をみいだすとともに入所児童のニーズ等への理解を深めることを目的とした。
8．児童養護施設職員の職務上のストレスが私生活に与える影響	共著	平成 20 年 3 月	日本発達心理学会第 19 回大会発表論文集, p.461	入所児童の保護者の役割を求められることが多い児童養護施設職員は職務上の負担、ストレスは大きいと感じている職員も多い。それらは職場を離れ私生活においても何らかの影響を与えているかということについて調査し職員のメンタル面のケアの際に役立てていくことを目的とした。
9．大学生の子ども観、人生観、および子育て観の関連性	共著	平成 22 年 9 月	東北心理学研究第 60 号, p.67	少子化・晩婚化・非婚化・就労等女性の社会進出が進む中、青年期の女性がどのような子ども観、子育て観をもっているか。また、理想のライフスタイルについて調査する。さらに、保育科関連学科とその他の学科によって違いが見られるかを検討した。
10．大学生の子ども観、人生観、および子育て観の関連性(2)	共著	平成 23 年 3 月	日本発達心理学会第 22 回大会発表論文集, p.308	少子化・晩婚化・就労等女性の社会進出が進む中、青年期の女性がどのような子ども観、子育て観をもっているか。また、理想のライフスタイルについて調査し、それら 3 項目の関係性を探った。
11．災害時の心のケアに対する一般のイメージ-インターネット質問サイトの投稿分析から-	共著	平成 23 年 8 月	東北心理学研究第 61 号, p.72	東日本大震災により、被災者に対する“心のケア”の関心が高まった。そこで、インターネット質問サイトの投稿から、一般の人々が災害時の心のケアについてどのようなイメージや関心をもっているかを分析した。
12．災害時の心のケアに対する一般のイメージ(2)－”子どもの心のケア”に関する質問投稿の内容分析－	共著	平成 24 年 3 月	日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集, p.361	前掲 11 の研究より、本研究ではその投稿の中から「子ども」に焦点を当て分析を行い、震災による子どもへの影響（症状等）や保護者の子どもに対する不安やニーズ等を明らかにするとともに支援策を検討した。
13．災害時の心のケアに対する一般のイメージ(3)－震災後半年以降の関心の変化について－	共著	平成 24 年 7 月	東北心理学研究第 62 号, p.44	前掲 11・12 の研究より、本研究ではデータを追加することにより、投稿数の推移や質問内容の変化などを明らかにした。
14．原子力災害が子育て中の母親に与え影響(1)−インターネット質問サイト投稿	共著	平成 25 年 3 月	日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集, p.540	東日本大震災による原子力災害では、放射能による子どもへの影響が強い懸念を集めた。そこでインターネット質問サイトで保護者から投稿された原子力災害による子どもへの不安や心配、ニーズ等を明らかにすることで、今後の支援を考える際に役立てていくことを目的とした。本研究では内容の概要を分析した。

分析より−				
15. 原子力災害が子育て中の母親に与え影響(2) −回答者の属性や回答内容に着目して	共著	平成25年5月	東北心理学研究第 63号, p.30	前掲14の研究より、本研究では回答内容を中心に分析をおこなった。
16. 原子力災害が子育て中の母親に与え影響(3) −質問者がベストアンサーに選んだ回答の特性について	共著	平成26年3月	日本発達心理学会第25 回大会発表論文集, p.581	前掲 14・15 の研究より、本研究では保護者が最も評価した回答の特性について分析を行うことで保護者がどのような回答を求めているか等、ニーズや期待を明らかにし支援策を考察した。
17. 原子力災害と子育て−新聞報道の分析から−	共著	平成 26 年 11月	東北心理学研究第 64号, p.45	東日本大震災による原子力災害では、放射能による子どもへの影響が強い懸念を集めた。メディアなどの公のものは原子力災害と子育についてどのように取り上げているかを新聞記事データベースより分析する。本研究では内容の量的分析をおこなった。
18. 原子力災害と子育て(2)−新聞報道の分析から−	共著	平成27年3月	日本発達心理学会第26 回大会発表論文集, p.1-020	前掲 17 の研究より、本研究では内容の質的分析をおこなった。
19. 原子力災害と子育て (3) −新聞報道の分析から−	共著	平成27年6月	東北心理学研究第 65号,p68	前掲 17・18 の研究より、本研究ではその中から代表的な記事をいくつか報告し、内容を考察した。

その他　(表彰等)		